

Title	大学学部予備教育課程(Uコース)における作文授業の実践報告(2) : 「U初級コース作文指導項目リスト(2013年度版)」に基づく実践
Author(s)	三登, 由利子; 藤井, 千枝; 菅, 摂子 他
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2014, 13, p. 83-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56962
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大学学部予備教育課程（Uコース）における 作文授業の実践報告（2）

—「U初級コース作文指導項目リスト（2013年度版）」に基づく実践—

三登由利子・藤井 千枝・菅 摂子・真下 恭子

【要旨】

本稿は、大阪大学日本語日本文化教育センターの学部進学予備教育課程（Uコース）において実施されている初級作文授業の実践報告に続くものである。筆者らが作成した「U初級コース作文指導項目リスト（2013年度版）」を参照し、各クラスで実践した中級期の授業について報告するとともに、同リストとの関連を検討した。また、各クラスにおいて有効であった活動についても紹介した。さらに、報告から明らかになったクラス共通の課題解決に向けて教師間の協働について提言を行った。

1. はじめに

大阪大学日本語日本文化教育センター（以下、「CJLC」とする）のUコース¹⁾は、一年間の大学学部予備教育課程であり、同コースの作文授業は、論文作成を最終目標とする。この目標に向けた効果的な学習のあり方を検討するため、三登ほか（2014）では、2013年度U初級コースの四つのクラスで行われた第一期の作文授業（作文開始から9月試験まで）について、授業概要を報告した。また、授業で扱った内容を東京外国語大学留学生日本語教育センター作成の「JLC日本語スタンダード2011改訂版」と照らし合わせて検討した。さらに、作文指導における下位目標を明確に設定するために、2013年度第一期の実践とそれ以前の実践・経験をもとに「U初級コース作文指導項目リスト（2013年度版）」（以下、「作文指導項目リスト」とする）の作成を試みた（作文指導項目リストは資料として稿末に添付）。そこで「指導項目」として挙げたものは、最低限、どのクラスでも授業で扱うべきと考えて選んだものである。

本稿は、それに続く第二期についての実践報告であり、次の三点を目的としている。

一つ目は、「作文指導項目リスト」をもとにデザインした第二期の作文授業（9月試験終了後から12月試験まで）について振り返ることにより、指導項目が授業の中でどのように具体化され、学生の達成度はどのようなものだったかを把握することである。学生の能力の向上に向けてさらなるトレーニングが必要な項目が明確にできれば、それらは、2013年度の学生にとっては、第三期（12月試験からコース終了まで）に引き続き学習しなければならない課題となる。また、授業担当者にとっては、次年度以降の指導方法改善に向けての示唆となる。

本稿の目的の二つ目は、各担当者が授業活動を振り返って「何をどう教えた結果、何が起きたか」を詳細に記述し、自分の実践を「他者とのインターアクションのふるいにかける、よりよいものにしていく（細川2005, p.11）」ことである。

そして実践の振り返りの過程で、各クラス共通の問題を明らかにし、作文担当者の枠にとどまらず、U初級コースで日本語指導を担当する教師の協働に向けた提言につなげることが三つ目の目的である。

以下では、まず、2013年度の第二期の作文授業の概要を紹介する（第2章）。次に、各クラスの授業について報告し、授業内容と「作文指導項目リスト」との関連を検討する。また、各ク

ラスで有効だった活動例とその課題についても紹介する（第3章）。さらに、各クラス共通の課題についても考察し、課題解決のための教師間の協働に向けた提言を行いたい（第4章）。

2. U初級コースの第二期作文授業について

本章では、9月試験終了後に始まる第二期の作文授業について述べる。

表1 主教材の進捗と作文授業

クラス/学生数		U 4 / 6名		U 5 / 5名		U 6 / 6名		U 8 / 7名	
	コース 開始 から	主教材 の進捗	作文の 授業	主教材 の進捗	作文の 授業	主教材 の進捗	作文の 授業	主教材 の進捗	作文の 授業
10/3	19週目	中級15課	12回目	中級16課	13回目	中級16課	13回目	中級8課	9回目
10/10	20週目	中級17課	13回目	中級18課	14回目	中級17課	14回目	中級10課	10回目
10/17	21週目	中級18課	14回目	中級19課	15回目	中級18課	15回目	中級12課	11回目
10/24	22週目	中級19課	15回目	中級19課	16回目	中級19課	16回目	中級14課	12回目
10/31	23週目	中級20課	16回目	中級20課	17回目	中級20課	17回目	中級16課	13回目
11/7	24週目	中級21課	17回目	中級21課	18回目	中級21課	18回目	中級17課	14回目
11/14	25週目	ポイント20	18回目	ポイント20	19回目	ポイント20	19回目	中級19課	
11/21	26週目	ポイント20	19回目	ポイント20	20回目	ポイント20	20回目	中級21課	15回目
11/28	27週目	中級復習	20回目	中級復習	21回目	中級復習	21回目	中級復習	16回目
12/5	28週目	12月試験							

表1は、第二期の主教材の進捗と作文授業の実施回数を示したものである。表が示すとおり、クラスによって主教材（『中級日本語』）の進捗や作文指導にあてる時間が異なる²⁾。なお、2013年度の第二期においては、U8を除き、各クラスに1名、大学院生がティーチングアシスタント（以下、「TA」とする）として授業に参加した。

試験は、2013年度12月試験の場合、作文の字数はクラスにより異なるが、テーマは全クラス共通³⁾で、授業で取り上げ教師の添削を受けた課題の中から2題出された。テーマAは、「大学の授業中に学生が自分で勝手にノートPC、iPadなどのタブレット、スマートフォンなどを使うことについてどう思いますか。あなたの意見と理由を書きなさい」（以下、「PC使用」とする）であった⁴⁾。テーマBは、「『友だちは多い方がいい』という意見と、『いや、少なくともいい』という意見があります。あなたはどちらの立場に立ちますか」（以下、「友だち」とする）で、自分が論じようとしている「友だち」とはどのようなものか定義した上で、どちらの立場に立つか理由とともに述べ、自分と反対の立場の人に反論することも求めた。試験問題は2題とも、作文授業担当者が案を出し合い、協議して決めた。

試験の評価は、日本語の正しさの面（文法・文体、語彙・表現、文字・記号、使用表現等のバリエーション）、および内容・構成の面（テーマとの整合性、構成、分かりやすさ）から行われる。

次に、各クラスにおける第二期の授業について報告する。

3. 各クラスの第二期作文授業について

本章では、2013年度第二期のU8、U6、U5、U4の作文授業について授業概要を報告す

る。それとともに、授業で扱った内容を「作文指導項目リスト」（稿末資料）と照らし合わせ、各項目がどれだけ授業で具体化できたか、また学生の達成度はどうであったか検討する。さらに、各クラスで有効だったと思われる活動例について紹介する。最後に、授業担当者の気づきとそこから浮かび上がった課題について述べる。

3.1 U8（授業担当者：三登由利子）

3.1.1 U8クラス概要

U8は、7名全員が理科系の男性で、国籍は、インド、ウガンダ、エチオピア、スリランカ、ネパール、ブルネイ、ベトナムである。

3.1.2 授業概要

9回の授業のシラバスを組み立てる際に重視したことが三点ある。一点目は、作文指導項目リストに挙げた第二期の目標11個をうまく課題の中に組み込むこと。二点目は、適切な文体で事実情報を正確に描写する練習から始めて、しっかりした構成をもった意見文へと無理なく移行できる流れにすること。三点目は、「何を書いたらいいか分からない作文は大変」という学生たちの声に配慮して、理系の学生の興味をひきそうなトピックを選び、「これなら書けそう、書きたい」と思ってもらえるようにすることだった。そこで、12月試験の共通テーマを含めて次の六つの課題を選び、表2の順に配置した。

課題①「心臓の働き」と課題②「ロボットと人間の比較」は、ビデオクリップを視聴して得た情報に自分の知っていることも適宜加え、指定されたアウトラインで説明文を書く課題である。課題③「最後通牒ゲーム」では、口頭で紹介されたゲームのルールを事実として分かりやすく説明した上で、自分がプレイヤーになった場合にとる行動とその理由を明確に述べることを求めた。全クラス共通課題である④「友だち」（12月試験のテーマB）と⑥「PC使用」（12月試験のテーマA）は、決められた構成で、できるだけ説得力のある根拠を挙げて自分の考えを主張するよう指示した。課題⑤「国費留学」は、自分の経験（事実）とそれについての考えを分けて書くこと、英語圏への留学など比較対象として適切な例を挙げて日本留学と対比させた上で、日本留学のいい点と悪い点を述べることを求めた。

「だ・である体」と連用中止形の練習には、『小論文への12のステップ』を、その他は自作教材を使った。

表現の練習、内容や構成の吟味、リライトなどを授業時間に十分行うためには、作文に90分1コマ使いたかったが、12月の試験までに中級の教科書を終わらせるという目標を考えると、第一期同様、作文に使える時間は十分とは言えなかった（使用時間は表2参照）。

では、限りある時間をどう使うかだが、学生に「書けない」と思わせないための情報提供およびブレインストーミングに使う比率を高くした。個人個人の問題点は、作文に書きこんで返却するか、メールで宿題を送ってくる学生には、Wordのコメント機能を活用して伝えることが多かった。

フィードバックの際に重視したのは、よくできている点をほめることだった。一人の学生の作文で感心させられた部分を読み上げることもあったし、全員の作文について、うまく書けている部分を紹介することもあった。

表2 第二期U8授業概要

週	回	授業内容	テーマ・課題	時間
19	9	<ul style="list-style-type: none"> 定義の表現、動きなどをその順序に従って述べる表現を紹介 未習の言葉の意味・用法を確認した後、NHKデジタル教材のビデオクリップ「心臓の動き」(156秒)⁵⁾を視聴 	課題①「心臓の働き」 心臓の形状、構造、働きと血液の流れについて正確に描写する(500字以上)	25分
20	10	<ul style="list-style-type: none"> 「だ・である体」の復習 比較の表現を紹介 未習の言葉の意味・用法を確認した後、ビデオクリップ「ロボットにはできない人体の動き」(194秒)⁶⁾を視聴 	課題②「ロボットと人間の比較」 両者の動きを比較し異同を正確に描写する(500字以上)	45分
21	11	<ul style="list-style-type: none"> 「心臓」フィードバック 連用中止形の復習 応用数学の一分野であるゲーム理論で扱われるゲームの一つについて口頭で説明。その後、プレイヤーの取りうる行動のパターンとその理由について全員でブレインストーミング 	課題③「最後通牒ゲーム」 ゲームのルールを正確に説明した上で、自分がとる行動とその理由を述べる(600字以上)	30分
22	12	<ul style="list-style-type: none"> 「ロボットと人間の動き」フィードバック 既習の意見述べの表現を学生に挙げさせる⁷⁾ 「序論、自分の意見とその理由(最低三つ)、反対意見に対する反論、まとめ」という構成で書くよう指示 どんな意見が考えられるかブレインストーミング 	課題④「友だち」(12月試験テーマB)(800字以上)	40分
23	13	<ul style="list-style-type: none"> 先行オーガナイザー⁸⁾について説明 「最後通牒ゲーム」フィードバック(特に、先行オーガナイザーに注目し、それがうまく使われている作文を読み上げ、先行オーガナイザーがあればより読みやすくなったと思われる部分を指摘) 今回の課題で注意すべき点(先行オーガナイザーを使うこと、事実と意見を分けて書くこと、比較・対比の表現を意識して使うこと、結論部分に評価・主張を入れること)を説明 	課題⑤「国費留学」 国費留学生として日本(あるいはCJLC)に留学することのいい点と悪い点について述べる(800字以上)	35分
24	14	<ul style="list-style-type: none"> 「友だち」フィードバック 今回の課題のもととなったニューズウィーク誌の記事について口頭で説明 「友だち」と同じ構成で書くよう指示 どんな意見が考えられるかブレインストーミング 	課題⑥「PC使用」(12月試験テーマA)(800字以上)	30分
26	15	作文試験の課題や評価基準等についての説明のみ		5分
27	16	1月からの論文授業とテーマ選びについてオリエンテーション		40分

3.1.3 「作文指導項目リスト」との関連

中級前半の目標として挙げた六つの項目のうち、「Ⅱb.話し言葉を混ぜずに文体を統一して書ける」を除く五つについては、問題を感じないものが書けている。課題に応じた項目を示して、それを意識して書くように指示すればできていた。「Ⅱa.の主述の対応」という、日本語学習者一般にとって問題となりやすい点についても、それほど乱れを感じる文はなかったが、逆に言えば、それだけ単純な構造の文が多いということでもある。

ただ、「Ⅱb.文体の統一」については、最後の課題を書いた時点でも徹底は難しかった。問題点は三種類に分けられる。一点目は、「です・ます」が混在してしまうこと。二点目は、い形容

詞に「である」をつけてしまうこと。三点目は、話し言葉の使用である。

一点目と二点目については、問題の現れ方に個人差が大きい。最初に練習して以来、ほとんど問題がなかった学生と、課題が進むにつれて改善が見られた学生がいる一方で、課題①から⑥まで通して注意し続けたにもかかわらず、この二つの問題点が改善されない学生も2名いた。

三点目については、市販の教材に言葉のリストと適語への書き換え練習が用意されているが、この時期にはまだ難しいものもあると考え、添削して注意するにとどめた。U8は、ほとんどの学生が来日後にひらがなから学習したので、自然な話し言葉のインプットが少なく、教科書の日本語の影響をより強く受ける。そのため、作文に見られる話し言葉の影響は、レベルの高いクラスと比べて限定的だと言える。しかし、教室での学習が進むにつれて、教室外からのインプットが増え、話し言葉が使われ始めるのも、このクラスの特徴だろう。

作文での話し言葉の使用状況を調べると、課題①から③では、「でも」、「けど」、「ちょっと」の三つを3名の学生が使っているのみだった。そのうち2名は、課題⑤でも「でも」、「けど」を使っているが、課題⑥では、使用が見られなくなり、「しかし」、「が」に置き換わった。別の1名は、課題①で「とか」を使い、注意を受けて使わなくなっていたのだが、課題⑤と⑥で、再び使ってしまった。また、3名が課題⑤と⑥で「いっぱい」、「たくさん」、「ぜんぜん」、「とか」を新たに使い始めている。話し言葉と書き言葉の使い分けについては、第三期の開始時にしっかりした練習と意識化を行うこととした。

中級後半に扱うことと決めた五つの項目のうち、「IIk.情報の整理」については、ほぼ問題ないものと見ている。課題①から③では、必要な情報が分かりやすく整理されて述べられていたし、課題⑤でも、言語学習、専門教育、日常生活といった形で留学生活のさまざまな側面についての情報が整理されて書かれていた。「IIg.定義」の表現についても、複数の課題で使用されている。

残る三つ、「IIh.事実と考えを分けて書ける」、「IIi.予想される反論に反駁できる」、「IIj.根拠を挙げて主張が述べられる」については、まだそのスキルの練習を目的とした課題を3、4回出したに過ぎず、形の上ではできていても、中身がともなわない。たとえばIIi.では、形の上では反論が取り上げてあっても、説得力があるとは言えない。反対意見への反論を取り入れた構成で書くようにと指示されたから、言われた通り反対意見を一つ紹介し、「こういう意見があるが、そうは思わない」と書いたにとどまっている。予想される反論を取り上げてそれに反論するという行為は、自身の論理を補強し、主張の説得力をより高めるために行われるはずである。しかし、そのような行為の必要性を理解した上で書いているわけではないため、これらの点については、文体の統一と同じく、今後も継続した練習と意識化が必要だろう。

3.1.4 授業活動例とその考察

本節では、二つの理由から、課題③「最後通牒ゲーム」の授業について紹介した上で、それ以外の課題を扱った授業の問題点と改善の方法について考えていきたい。

まず、課題③の授業について紹介する理由の一点目は、学生の作文に評価できる点があるが他の課題より多かったことだ。評価できたポイントとしては、序論の内容が適当でうまく書けていることと、他の作文に比べて納得できる理由が挙げられていたことがある。理由の二点目は、学生がテーマに興味を持ち、自分でかなりよく調べて情報を補い、それをうまく整理して書けて

いることである。

授業ではまず、学生に、「ゲーム理論 (Game theory)」という言葉を知っているか尋ねたが、「ちょっと聞いたことがある」と言った学生が1名で、他は知らなかった。そして、応用数学の一分野であり、経済学や心理学など幅広い分野で扱われる理論であることも伝えた。この段階で、先を急いで、ゲームのルールを知りたがる者、スマートフォンで検索し始める者などがいて、教師としては、学生の「食いつき」に手ごたえを感じていた。

次に、「最後通牒ゲーム」というゲームのルール⁹⁾について、口頭で紹介した。ただし、学生たちがインターネットで何かしら調べるだろうと考えていたので、まずはゲーム理論そのものに興味を持ってもらえた方がいいと考え、「最後通牒ゲーム」という特定のゲームの名前は教えていない。

そして、学生たちに、自分がAならBにいくらオファーするか質問した。学生たちからは、5,000円、3,000円、1,000円など、思い思いの答えと簡単な理由が聞けた。

続いて、経済学が想定する「合理的な経済人」について「経済的合理性」という言葉とともに簡単に説明した。そして、AもBも合理的な経済人だという仮定のもとでは、Bにいくらオファーするのが正しいか質問した。さまざまな答えが出た中に「1円」という正解もあった。最後に、「序論、ゲームのルール説明、自分がAの時Bにオファーする金額とその理由、まとめ」という構成で作文を書くよう指示した。

学生の話では、全員がインターネットでゲーム理論や最後通牒ゲームについて調べた上で書いたということだったが、インターネット上の情報をそのままコピーした者はいなかった。

ここまでで紹介した課題③「最後通牒ゲーム」の作文とともに、課題①「心臓」と課題②「ロボット」の三つについては、指示したことが期待以上に書けたと評価できるものだった。しかし、それより後に書かせた課題④～⑥には、内容面に問題が感じられた。その理由を考えてみたい。

林 (2005) は、「わかりやすい文章を書く基本の一つは、多くの具体的事実や材料から説明することだ。(中略)文章は『食いつき』では書けないということだ。書く以前の仕込みの量がものをいう。仕込まれた材料が不足したところからは、考えも文章も生まれはしない。経験や調べた材料が十分にあって、他者に対して説明できる知識となっていることが第一だ (pp.68-69)」と述べている。

林のこの指摘から考えると、課題①と②については、十分な情報が与えられた上で生まれた文章であったと言える。また、課題③は、学生にとってはまったく知らないことだったが、興味も持てたので、自発的に十分調べた上で書く作業が始められたものと見ている。反対に、課題④から⑥は、学生にとっては、一見、身近なトピックで、深く考えずとも書けそうに見える。だから、「食いつき」で書き始めてしまった。また、難しいと気づいて、インターネットで調べようとしても、何を調べればいいのかよく分からない。そのため、わかりやすさも、説得力もやや欠けた文章になってしまったのではないかと推察される。

そうならないようにという思いから、授業で重視していたのが、事前のブレインストーミングであった。しかし、この活動自体、下調べなどないまま、ただ食いつきを言い合う場であった。そのため、林の言う「書く以前の仕込みの量」、つまり作文を書き始める以前に、学生にとって十分に言語化された状態になった情報の量という点でも、その整理という点でも、不十分な

ままの執筆となってしまったのだと思われる。

そのため、たとえば課題⑥「PC使用」で多く見られた問題点は、「授業中にタブレット等を使うことのデメリット（例：メールやゲームなどに気をとられ授業に集中できなくなる）」と「タブレット等を授業中に限らず多用することのデメリット（例：目が悪くなる、タイプばかりだと漢字を忘れる）」との混同であった。この問題点は、もちろんブレインストーミングの時点から生じていたので、注意していた。しかし、自宅での一人の作業になった後には、その注意が活かされなかったようだ。

この問題点への対応として、事前と事後の二種類の方法が考えられるだろう。一つは、作文執筆前に、ブレインストーミングにとどまらず、読んだり調べたりした上で「構成メモ」を作り、教師や他の学生たちとの意見交換を経たのちに書き始める方法だ。そして、もう一つは、作文執筆の後で、教師のコメント、あるいはピア活動によって他の学生からもらった意見を生かして、一度書いたものを改善する方法である。

現状では、試験をインセンティブにして、一つの課題についてのみ事後の方法をとっている。これを、教師とのメール上のやりとりにとどまらず、学生同士で意見を言い合う方法に変えたり、事前の活動を取り入れたりするには時間がかかる。しかし、なんとか課題の数を減らさずに、学生にとっての「書く以前の仕込みの量」を増やす方法を考えていくことが必要だと考えている。また、「最後通牒ゲーム」のように、学生が興味に動かされて「書く以前の仕込みの量」を自ら増やして意見文が書けるような新しい課題を見つけることも求められる。

3.2 U6（授業担当者：藤井千枝）

3.2.1 U6クラス概要

U6クラスは、男性3名、女性3名の計6名からなり、うち4名が理科系である。シンガポール（インド系）、ブラジル、ベラルーシ、マレーシア（中国系2名）、モンゴルの学生が在籍している。

3.2.2 授業概要

「意見文」を広く捉えれば、コラムや新聞の投書なども「意見を書いたもの」と言うことができるが、U6の授業においては、ただ意見を述べるだけでなく、根拠を明確にして説得力のある論理で組み立てられた狭義の「意見文」を目標とした。指導においては、論証の過程を重視し、論証の手順の練習として、まずテーマ①を扱い、そこでの練習を生かして12月試験の共通テーマA、Bに取り組んだ。

授業の流れは下の表3のとおりである。

3.2.3 「作文指導項目リスト」との関連

本節では、第二期の授業内容と作文指導項目リストとの対応を振り返る。

前半の6項目のうち、「IIc.決められたアウトラインにしたがって文章が書ける」ことに力を注ぎ、指導した直後のテーマ②「PC利用」において、この点は十分達成されていた。その他の項目についても、「IIb.文体を統一した文が書ける」という項目以外は達成されていた。

後半の5項目のうち、「IIg.定義が書ける」、「IIi.予想される反論に反駁できる」、「IIj.根拠を

表3 第二期U6 授業概要

週	回	授業内容	テーマ・課題
19	13	ガイダンス 表現（意見）の学習 テーマ①長所と短所を挙げ、整理する	テーマ①「留学生にとっての夕食と自炊」
20	14	表現（反論の予想・理由・根拠）の学習 テーマ①構成を図化（→図2） テーマ②読み物（大学の授業でのPC等使用について複数の論者の意見を紹介したもの）	テーマ②「PC使用」（12月試験テーマA） 構成図を完成させる ※第三期「論文」のテーマ決定
21	15	各学生の構成を共有 アウトラインの書き方の例（テーマ①を使用） テーマ②構成図の検討	テーマ②「PC使用」（12月試験テーマA） アウトラインを書いてくる
22	16	表現（引用・定義・範囲）の学習 テーマ②アウトラインの検討	テーマ②「PC使用」（12月試験テーマA） 第1稿執筆
23	17	テーマ②各ペアで第1稿の検討（チェックシートを使用→図3）	テーマ②「PC使用」（12月試験テーマA） 第2稿執筆
24	18	テーマ③グループで意見交換の後、アウトライン作成	テーマ③「友だち」（12月試験テーマB） 第1稿執筆
25	19	テーマ③各学生の定義と結論を共有・第1稿の検討	テーマ③「友だち」（12月試験テーマB） 第2稿執筆
26	20	テーマ③フィードバック	
27	21	テーマ②・③まとめ	

挙げて主張が述べられる」は、重点的に指導した直後の課題では達成できていた。しかし、それ以降の課題では、学生の自力での徹底は難しかった。「Ⅱh.事実と考えを分ける」、「Ⅱk.情報を整理しまとめられる」の2項目については、学生の記述（授業でPC等を利用する場合の機能の説明）を見てもよくまとめて書いており、学生たちは記述する力を十分身に付けていた。

第三期の項目からは、「Ⅲa.アウトライン作成」と「Ⅲf.引用」を扱った。

3.2.4 授業活動例とその考察

学生たちはいずれのテーマについても初稿段階で600字程度の作文を書くことができた。

意見文の指導の最初にテーマ①「留学生にとっての夕食と自炊」を通して、自分の主張を支える材料を整理し構成する練習を行った。これは三つの段階を踏んで指導した。

第19週の授業で、留学生にとっての夕食と自炊の長所と短所を、思いつくかぎり口頭で挙げさせ、教師が板書した。この段階では主張の一貫性よりも、たくさんのアイデアを挙げて言語化することを目標とした。学生たちも手元の表（図1）に記入しながら発表した。この過程で、考えを言葉にするのに時間のかかる学生からも、バランスよくアイデアが出された。

第20週には、「自炊」側と「夕食」側の双方について、前週作成したアイデアリストをもと

	自炊	夕食
いいところ	自分の好きなものが食べられる 部屋でのんびりたべられる (略)	料理が下手でもいい 後片付けをしなくてもいい・・・ (略)
悪いところ	失敗することもある (略)	わざわざ出さなければいけない (略)

図1 アイデアリストの例

に、意見の構成の例を示した（図2）。この活動には、二つの目的がある。一つ目は、予想される反論を挙げるといってもどんな内容を取り上げてもいいわけではなく、自分の主張との関連性を考えて選ぶ必要があると理解させることである。次に、図2を使って、「反論を設定→さらに反駁する」展開の例を示し、その説得力を確認することが二つ目の目的である。この練習を経て、最終的に「自分の主張とその理由—予想される反論—反論への反駁」という構造を示し、自炊と外食のどちらがいいか各自の主張を決めさせて、意見文の構成を考える練習をした。学生一人一人が用紙に自分の意見文の構造を書き、次週までに完成させて提出するよう指示した。

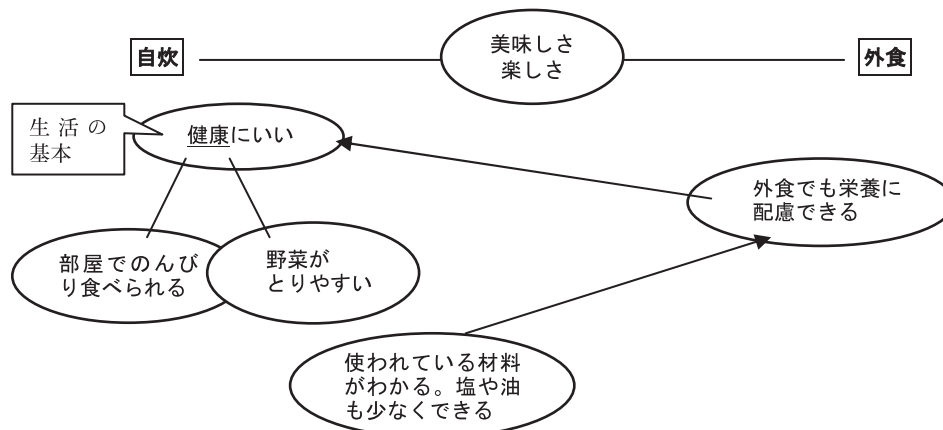


図2 意見文の構造として示した例

さらに第21週の授業では、意見の流れを確認しながら、箇条書きにしたアウトラインの例を示した。

これらの活動の後、学生たちにテーマ②「PC使用」のアウトライン作成と意見文執筆を課した。こうして書かれた第一稿を、第23週にチェックシート（図3）を使用し、ペアで第一稿を読みあい互いにアドバイスする活動を行った。これは意見文の構成についての意識化を促すことを意図したものだが、学生たちは予想以上にクラスメートの文章の内容を把握でき、チェックシートの内容を超えて、段落分けや本論の構成についてもアドバイスし合う様子が見られた。

言葉・文法・長さ	いいえ	_____	はい
文体はいいですか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
接続詞を上手に使っていますか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
長さは800字以上ですか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

構成・内容	いいえ	_____	はい
序論—本論—結論がありますか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
序論を読んで作文の目標がわかりますか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
本論は段落に分けられていますか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
結論を読んで意見がわかりますか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
序論と本論の関係はいいですか	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

図3 チェックシート

以上の第19～21週の活動は、アイデアをできるだけ多く言語化した上で、自身の論理を組み立てる上で最も有効に働くものを選び出し、効果的に配置できるようになることを目指したものであった。その結果、テーマ②「PC使用」の第一稿を見ると、構成については評価できるものになっていた。また、23週の活動からも、意見文の構成を意識化できていたことが確認できた。一方、構成に比べ、文のつながりや段落間の接続の表現にはまだ問題が多く、今後、練習方法の工夫が必要な点であると感じた。

3.3 U5（授業担当者：菅 摂子）

3.3.1 クラス概要

U5は、男性3名と女性2名の計5名から成る。出身国は、アメリカ（2名）、ギリシャ、ブラジル、ヨルダンで、文科系と理科系の混在クラスである。

3.3.2 授業概要

U5では、「作文指導項目リスト」に掲げられている中級前半と後半の11の学習項目を取り入れた授業を行うようにした。加えて、「決められた構成にしたがって説得力のある意見文を書く」と、「他者からのコメントを参考に自己推敲ができるようになる」ことを目標に授業を進め、これらの点については、最終目標である論文作成とあわせて第二期初回の授業で意識づけを行った。授業概要は表4に示す通りである。

第二期の中心的な活動は意見文を書くことであるが、U5ではまず、藤村ほか（1995）を参考に、『中級日本語』11課本文「ガラスの利用」を使って、テキストの文をモデルに「Ⅰ導入→Ⅱ本論→Ⅲまとめ」の構成で身の回りの物を一つとりあげ、「〇〇と私たちの生活」というタイ

表4 第二期U5授業概要

週	回	授業内容	テーマ・課題
19	13	最終目標と12月試験までの目標確認 『中級日本語』11課本文の構成と表現／中心文と支持文	課題①「〇〇と私たちの生活」というテーマで説明文を書く
20	14	意見文の悪い例を読んで良くない点を話し合う 意見文の構成（背景説明→問題提起→立場表明→理由→反論→まとめ）／順序、列挙、例示／論文のテーマ	課題②背景説明と問題提起文を書く練習 問題 課題③論文のテーマを考える
21	15	事実と意見／反論／「モノ・コト」に注目する文／ 12月試験テーマA「PC使用」トピック導入、YouTube 視聴、ブレインストーミング	課題④テーマAの資料を読んだ上でアイデアシート記入する
22	16	テーマA資料内容確認、アイデアシートを元にグループ ディスカッション／引用の表現／文献検索方法	課題⑤テーマA第一稿執筆／ 引用練習／文献検索練習
23	17	引用の表現／定義／12月試験テーマB「友だち」トピック 導入、アイデアシート記入、グループディスカッション	課題⑥テーマB第一稿執筆 課題⑦テーマAのコメントを書く／ 引用練習
24	18	引用練習F.B／モデル意見文を読む／テーマAピア活動	課題⑧テーマA第二稿執筆 課題⑨テーマBのコメントを書く
25	19	テーマBピア活動／「小学生に携帯電話は必要か」資料 読解、アイデアシート記入、グループディスカッション	課題⑩テーマB第二稿執筆 課題⑪「小学生に携帯電話は必要か」第 一稿執筆
26	20	説明文、テーマA第二稿修正	課題⑫テーマA原稿用紙に清書
27	21	テーマB第二稿清書、「小学生に携帯電話は必要か」第 一稿修正／冬休みの宿題について説明	

トルで説明文を書く練習を行った。この練習を取り入れたのは、本論の組み立て方として「歴史にそって述べる」「いい点、悪い点を述べる」「取り上げたものの効用を述べる」が提案されており、いずれの書き方を選択しても意見文の中に応用できると考えたからである。また、本文を利用して、中心文と支持文についても確認した。

第14回目以降は、意見文を書くための学習が中心である。手始めに、良い意見文とはどういったものかということに気づかせるため、石黒ほか（2009）にある「中学生に制服は必要か」を用い、グループで問題点を話し合う時間を持った。そこから、意見文を書く際には意見の一貫性や説得力のある主張などに留意しなければならないことを確認した。

意見文の構成については、過去に留学生が書いた作文を例に構成を考えさせ、「Ⅰ導入と問題提起→Ⅱ意見（立場表明）→Ⅲ主張と根拠→Ⅳ反対意見に対する反論→Ⅴまとめ」という構成で書くこととした。構成を確認した後は、各構成部分に必要な表現を提示し、それらを使って文を作る練習も行った。

第16回目からは、基本的に①テーマの導入、②アイディアシートの記入（次節で述べる）、③②を使ってグループでのディスカッションをし、④次週までに1000字を目標に作文を書いてくる（第一稿）という流れで進めた。第一稿については第一期に引き続きピア活動を行った¹⁰。添削は、TAが文法や漢字などの間違いに印をつけ、教師は内容についてのみコメントした。つまり、学生は2種類の添削された作文を受け取るということになる。学生はそれらとクラスメートからのコメントを基に第一稿を書き直してくることを次の課題とした（第二稿）。第二稿は教師添削のみとし、クラス全体および個別にフィードバックを行い、授業中に修正の時間をとった。

意見文のテーマは、12月試験の共通のテーマA「PC使用」とテーマB「友だち」の他に、U5では「小学生に携帯電話は必要か」（以下、「携帯」とする）について書いた（課題⑩）。種類としては、いずれもどちらの立場に立つかを表明し、その理由と根拠を述べるものになる。テーマAと「携帯」については新聞・雑誌記事を参考資料として使用し、それらを意見文の中に引用するのは自由とした。

教材は自作プリントの他、『表現テーマ別 にほんご作文の方法』、『小論文への12のステップ』の一部を使用した。作文にかけた時間は週によって異なるが、週1回2コマの授業のうち、およそ70分から90分を使うことができた。

これらの他に、U5では1月以降の授業回数が少ないことを考慮し、第三期に行う論文作成の準備としてテーマ選びと文献検索練習を行った。

3.3.3 「作文指導項目リスト」との関連

中級前半から後半までの11の学習項目のうち、「Ⅱb.文体の統一」については第一期から練習を重ねたため、定着が見られた。また、「Ⅱd.順序」「Ⅱe.列挙」「Ⅱf.対比」「Ⅱg.定義」は、それぞれ表現の提示と文作文の練習を簡単に行ったこともあり、作文の中でも概ね問題なく使われている。「Ⅱc.アウトライン」も、1名は定着までに時間がかかったが、最終的には全員指示したアウトラインで書けている。第16回目に扱った「Ⅲf.引用」については第三期の学習項目であるが、テーマAと「携帯」で読んだ資料の情報を作文の中に使う場合に必要であるため、第二期で扱った。作文の中で実際に引用をしたのは全員ではなかったが、「（情報源）によると、～という」のような型は使えている。

その他、提出された課題から問題点が明らかになり、取り入れた項目もある。それは、最初の課題である説明文の中で、「何がどうした、どうなった」よりも「だれがどうした」という文の方が使われていたことである。そのため、第15回目の授業でモノとコトを中心とした文を扱うことにした。

第二期に十分扱えなかった項目としては、「Ⅱk.情報を整理し、まとめられる」がある。テーマAと「携帯」では資料を読んだが、「整理し、まとめる」活動にまで及んだとは言い難い。第二期は多くの表現を扱う必要がある上に、意見文のテーマの導入や構想にも時間が必要であるため、十分な時間をとることができなかった。今後は読解授業との連携も視野に入れる必要があるだろう。その他、課題が残る項目は「Ⅲj.根拠を挙げて主張が述べられる」「Ⅲi.予想される反論に反駁できる」である。それぞれ書くことはできているが、説得力があるかどうかという点では学生によって差が見られたため、改善が必要である。(この点については次節でも述べる)

3.3.4 授業活動例とその考察

本節では、第二期に行った活動の中で「アイデアシート」の利用とピア活動の2つを取り上げる。

説得力のある意見文を書くには、読み手を説得する主張やそれを支える論拠が重要である。しかし、学習者によっては、自分の立場ははっきりしていても、論拠のアイデアがなかなか出てこないことがある。そこで、U5では吉田(2008)の「アイデアシート」を使用することにした。

アイデアシートとは、構想を考える手助けとなる構想支援のためのタスクシート(吉田2008)である。構想1から3の順で考えるようになっており、例1に示すように、テーマA「PC使用」の場合、大学の授業中にパソコンなどを「使っても良い」(表左)「使わない方が良い」(表右)の両方の立場について思いついたアイデアを書き込んでいき(構想1)、支持できるアイデアには○、弱点となるアイデアには×をつけ、左右で対応するものは線で結んでグループ化するという方法である(構想2)。グループ化した後は、どちらの立場で作文を書くか、理由としてどのアイデアを使うか、反対意見の人を説得できるかという質問に答えるようになっている(構想3)。吉田(2008)によると、シートを使った構想活動を行った学習者の意見文と使わなかった学習者の作文の間には、文節数の増加と内容(論理的整合)に有意差がみられたという。U5においては、意見文を書く前の作業として、アイデアシートを個人で記入した後、それらを使ってグループで話し合う活動を取り入れた。また、ディスカッション後に再度アイデアシートに追加記入する時間を設けることもした。

例1) テーマA「PC使用」のアイデアシート(学生の例)

【構想1】思い浮かんだアイデアを自由に書いてみましょう。

使っても良い	使わない方が良い
○手で書くより早い	×間違えたら直しにくい
○書いたことを間違えたら直しやすい	○先生の話に集中できる
○ネットで知らない内容と単語を調べられる	○ゲームで遊ばない
×書く練習ができない	○書く方がもっと覚えられる

活動の観察から、学生は両方の立場についてアイディアを書くことによって、情報の整理ができ、また、両方の立場について考えたり、○や×をつけたりすることでアイディアの偏りに気づくことができたようだ。さらに、個人ではあまりアイディアが浮かばない学生も、ディスカッションを通して他者の意見を聞くことによりアイディアが加えられたようで、第一稿を見ると、自分と反対の立場をとる学生の意見を取り入れて反論するものがあった。ただし、テーマによってはこの活動に十分な時間を取れなかったこともあり、このことが第一稿の内容に少なからず影響したように思われる。

次に、U5では、最終目標である論文執筆を見据え、自己推敲能力を高めるために、第一期に引き続き、提出された第一稿を使ってピア活動を行った。第一期はコメントを書く方法を取ったが、何回か試みた口頭の方が「やりやすい」という意見があったこともあり、第二期はクラスを2つのグループにわけ、同じグループの人の作文を読んで、わかりにくいところ、もっと説明してほしいと思ったところなどに線を引いたり、コメントを書いたりして書くことを課題とし、授業では口頭でコメントし合うという方法に変更した。ピア活動の際には、教師とTAも介入し、教師は進行の手助けや、求められた際にはコメントをしたり、活動の中で指摘されなかった点について発言したりした。活動中は毎回インターアクションが活発に行われ、内容に対するコメント以外にも「前より中級表現を使うようになったね」「この表現はすごくいいと思う」という褒めの発言も観察された。

ピア活動の効果を見るために、広瀬（2000）と影山（2001）の分類基準を援用してテーマA「PC使用」の第一稿と第二稿を分析したところ、文・段落レベルでの「内容に影響を与えるレベルの推敲」よりも語レベルでの「内容には影響を与えない表面的な推敲」の方が多い結果となった。その理由としては、第二稿を書く際、学生の手元には漢字や文法間違いについて添削された原稿があったことや、ほとんどの学生は主張や根拠を大きく変更しなかったことが考えられる。ただし、前者の推敲が全くない学生はおらず、説明不足やわかりにくさを補う文レベルでの「加筆」や「書き換え」がなされている。特にピア活動の影響とみられるものには、資料からの引用をしている他の学生の作文を読むことにより、自分の作文にも根拠としてそれを入れたり、自分と反対の立場をとる学生の主張や根拠を新しく反駁材料として取り入れて、段落ごと大幅に書き換えたりするという推敲があった。

以上述べたようなアイディアシートの利用やピア活動により、作文の構想や推敲に効果が認められた一方、学生によっては字数がなかなか1,000字に達しないという問題があった。その原因の一つに、主張を支える支持文、つまり根拠を述べる文が十分でない点があげられる。ある学生を例にとると、支持文といえば中心文についての例や理由を書く文と考えるようで、一つの主張に対して「例えば」または「なぜなら」を使って短く根拠を述べるだけで次の主張に移ることを繰り返すという特徴が見られた。この支持文の種類少なさは、同時に説得力の有無にもつながる。説得するときの主張と理由づけの構造について井上（1989）は、論を精密に行うには、理由づけだけでは十分ではなく、理由の裏付け、限定、反証、例外、制限等が必要であると述べている。このことから考えても、字数だけでなく説得力の面からも理由や例示だけでは不十分であり、井上が挙げた種類の文のほかに、他の学生の作文に見られるような資料からの引用や、「～たら」「～ても」のような仮定的条件を述べる文などがあれば、字数も内容も改善できるだろう。

この対策として、第18回目の授業では、留学生が書いた作文をモデルに支持文の例を提示したが、それだけでは十分に改善されなかった。その原因として、主張はあってもそこから発想を広げられないことの他に、学生の持つ良い作文に対するビリーフ¹²⁾ (beliefs)、それによるピア活動後の推敲やピア活動の効果への影響が考えられる¹³⁾。実際にこの学生は推敲について、「書きたいアイデアを全部一度に書くので、その後は新しいアイデアがあまり出せない」と述べており¹⁴⁾、推敲後の第二稿でも、わかりにくさは改善されていたが、新たな主張や根拠の加筆がないため、字数は多少増えても、説得力には変化がみられなかった。今後は、このような学生のためにも、主張のアイデアを出すだけでなく、それらを支える説得力のある根拠が述べられるようにアイデアシートを改善し、話し合いにおいても一つの主張についていろいろな角度から考え、発想を引き出す活動に広げることを課題としたい。

3.4 U4 (授業担当者：真下恭子)

3.4.1 クラスの概要

U4は、全員が文科系の学生で、男性2名、女性4名の6名のクラスである。国籍は、ベトナム、ハンガリー、インド、モンゴル、エストニア、ペルーが各1名となっている。

3.4.2 授業の概要

第二期においては、第三期の「論文」作成の前段階として「意見文」を扱い、以下を中心的な目標と定めて授業を行った。

- (1) 適切な「論拠」をもとに明確な「主張」を述べる
- (2) 「事実」と「意見」を区別して述べる
- (3) 「意見文」の構成を学ぶ

第一期でも、意見を述べることはあったが、国や人物の紹介など「説明文」の最後の感想や評価といった付加的な記述であった。「意見文」を扱うにあたり、まず、初回(第12回)の授業において、Uコースにおける作文授業の最終目標が、「レポート・論文を書く基礎力を身に着ける」こと、第二期で扱う「意見文」が第一期で書いた単なる「意見」とは異なること、そのために必要なスキルを学ぶということを確認し、論文執筆までの学習項目を概観した。そして、第二期で扱う学習項目をまとめた簡単な自作の冊子を配布した。項目は、「論文の構成」「事実文と意見文」「理由の述べ方」「意見文の構成」「定義文」「問題点を述べる」「変化・対比・比較の表現」「図表の説明」「引用」などで、各回の授業は、その個々のスキルに順に焦点をあてていった。

授業内では各項目に関連した練習を行い、その後、課題作文の構成メモを作らせ、作文執筆については宿題とした。作文の構成は教師が指定した(表5中の《 》に示す)。宿題の作文(第一稿)については個別にフィードバックを行い、書き直し(第二稿)をその次の週に再提出させた(共通テーマの「友だち」と「PC使用」については、授業内で内容の練り直しの時間を設け第三稿まで書かせた)。

学習項目は、まず、「事実」と「意見」を書き分ける練習から始めた。次に、「主張(意見)」を支える「根拠(理由)」のアイデアを出させて整理させ、そのアイデアリストを使って「意見」を述べさせた。上記のようなタスクが論文の主張と根拠の述べ方につながる練習である

など、各学習項目導入時に第三期の論文との関連を意識させた。これらの練習の後、「①意見（主張）→②理由→③②の具体例や説明→（④反対の立場への反論）→⑤まとめ」の構成の意見文の課題を与えた。ただし、反対意見に対する言及を加えるかどうかについては、初回は学生にゆだね、次の回の課題作文で構成に加えるように指示した。

第二期で与えた課題には、「〇〇の是非」のような「二者択一型」のもの（△）と、問題点を指摘した上で対策を考え、提言を述べるような「問題解決型」のもの（▲）があり、作文の構成は異なったものとなる。最初の二つの課題で前者を扱った後、後者の練習に移った（表5参照）。

表5 第二期U4授業概要

週	回	授業内容	テーマ・課題
19	12	<ul style="list-style-type: none"> 論文の構成について説明 事実と意見を書き分ける (事実文と意見文の説明/二択問題について意見と理由(事実)を書く練習) 	△「大学生に体育の授業は必要か」 《意見→理由→理由の例・説明→まとめ》
20	13	<ul style="list-style-type: none"> 理由を述べる表現の紹介 主張を支持する根拠を考える (意見文を数題提示しその根拠となる文を考える練習) 	△「友だち」(12月試験共通テーマB)(1回目) 《意見→理由→理由の例・説明→反論→まとめ》 *「友だち」の定義を加えることを指示
21	14	<ul style="list-style-type: none"> 定義をする(定義文の練習を行った後、「リサイクル」の定義を考えさせる) 問題点をあげる(表現の紹介) 	▲「ゴミのリサイクルについて」 《言葉の定義→現状説明→問題点の指摘→対策》 *「リサイクル」の定義についてはクラスで共有
22	15	<ul style="list-style-type: none"> 説得性を高める (根拠となる具体例・説明を考える) 「友だち」に関わる場面や状況、関わり方、受けた影響などをシートに書かせて意見を述べさせる 	△「友だち」(テーマB)(2回目) *第一稿では抽象的な記述が多かったため、具体例や説明を加えて説得性を高めるように指示
23	16	<ul style="list-style-type: none"> 資料(図表)を説明する表現 変化・対比・比較の表現 (いくつかのグラフを説明する練習) 	▲「高齢化社会」 《図表の説明→問題点の指摘→対策》 *使用する図表は教師が配布
24	17	<ul style="list-style-type: none"> 要約・引用 (引用表現の紹介/テキスト18課本文のコラムの意見の要点をまとめる) 	△「騒音問題」(公共の場でのアナウンスの是非) 《他者の意見の引用→自分の意見》
25	18	<ul style="list-style-type: none"> 主張にそった資料の利用 (作文の関連記事をクラス内で読解・共有) 	△「PC使用」(12月試験共通テーマA)(1回目) *記事を参考に意見を述べる
26	19	前回作文FBを参考に練り直し	△「PC使用」(テーマA)(2回目) *字数は1,000字以上とする
27	20	論文構成やテーマの選び方について	「論文」のテーマ選びと資料集め(宿題)

3.4.3 「作文指導項目リスト」との関連

ここでは、「作文指導項目リスト」の第二期と今回の授業実践の対応を見ていく。

第二期前半の指導項目については、ほとんどが第一期の授業で導入されており、「II a.主述の対応」「II b.文体に適した語彙」など定着に時間がかかる項目も徐々に改善が見られた。「II f.対比」については、図表を説明する際によく用いられ、テーマBの作文でも多くの学生が、「友人」と「知り合い」を対比させて記述していた。

第二期後半の項目のうち、「Ⅱh.事実と考えを分けて書ける」、「Ⅱi.反論を予想して書くことができる」、「Ⅱj.根拠をあげて主張が述べられる」は、前節で述べた指導方法で、重点的に練習した。「Ⅱg.物事の定義が書ける」については、「友人」(第13回)「リサイクル」(第14回)で扱った。定義を述べる表現を練習した後、「友人」では、「自分にとっての友人」の定義を明確に述べることができた。「リサイクル」では、用法が混同されがちな「リサイクル」と「リユース」とを明確に区別して定義させた。

また、U4は作文指導に十分な時間を持てたこともあり、第三期の項目の一部も練習することができた。「Ⅲg.図表のデータの説明が書ける」では、関連表現(例:少ないことを強調したい場合は「～にとどまる」、逆の場合は「～に達している」など)を紹介した後、教師が与えたグラフについて説明を書かせた(第16回)。

「Ⅲf.ルールに則って引用できる」は、第17回に扱った。主教材の『中級日本語』18課の本文中に対立する意見のコラムがあるので、その一部を要約した上で、引用して作文を書く課題を与えた。構成は「①二つのコラムの要約→②理由(具体例)をあげて自分の意見を書く」という形に統一した。続く第18回の課題(テーマA)も、関連資料から必要な個所を選択、引用してよいと指示した結果、多くの学生が効果的に引用表現を用いていた。

3.4.4 授業活動例とその考察

この節では、「意見文」を書くにあたりアイデアを出し整理するために行った活動について述べたい。今回、課題として与えた作文の意見の述べ方には、大きく分けて「二者択一型」のものと「問題解決型」のものがある。主張とそれを支える適切な根拠を示すスキルに重点をおくため、「二者択一型」の主張をする作文からスタートしたが、問題点を挙げそれに対する提言をする「問題解決型」の課題も設けた。社会問題などのテーマについて、「問題点の指摘」と「解決策」を対応させて記述することもこの段階で学ぶべきスキルと考えたからである¹⁵⁾。

「二者択一型」については、作文を書く前に二者択一問題¹⁶⁾を数題与え、二つの立場についてメリット、デメリットを表に記入し、その後ペアで話し合わせるなどしてアイデアの整理の練習をし、主張のサポートや反対の立場への反論に利用した。このような相反する二つの立場についてアイデアを整理する活動は他クラスで紹介されているので、ここでは「問題解決型」の課題執筆の際に取り入れた活動と問題点を述べたい。

「問題解決型」については、「リサイクル」と「日本社会の高齢化」の2つの課題を扱った。これらの課題でも、クラス内で話し合い¹⁷⁾アイデアを出した後に、アウトライン(表5参照)を指定した「構成シート」に自分が使いたいアイデアを記入させ、それをもとに第一稿を書かせた。「リサイクル」の場合の構成シートには、「①リサイクルの定義、②リサイクルの例、③問題点の指摘、④自分が望ましいと考える対策案」の四つの項目を設けた。①の「定義」は、クラス全体で知っている情報を提示しあい一つのまとまったものを共有した。②についても、学生の知っている例を挙げさせ情報を共有した。③と④は個人作業で、授業ではできるところまで書かせ、作文の執筆は宿題とした。

以下に、「問題解決型」の各課題の第一稿における「問題提起」と「提言(解決策)」の内容面の対応を示す(表6、表7)。

表6 「リサイクル」第一稿の構成

	学生A	学生B	学生C
問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・機械とエネルギーが必要 →コストがかかり製品が高くなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・技術が古い① ・ゴミ置き場がない② 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴミを分別しないほうが楽 ・法律や制度を変えるだけでは難しい（予算が必要）
対策案	<ul style="list-style-type: none"> ・費用のかからないリユース・リデュースでゴミを減らす 	<ul style="list-style-type: none"> ・政府の経済支援 →技術向上① ・国民に実状を知らせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校で普及させている（リサイクル会社と学校が契約）
	対応が間接的	②の対策がない	提言でなく事例の紹介

「リサイクル」の課題では、指摘された「問題点」と「対策案」の対応が不明確であったり、間接的であったりする、あるいは取り上げた「問題点」に対する「提言」が欠如しているという問題点が観察された（表6）。例えば、学生Cは、リサイクル会社と学校の協力という具体的な対策について記述していたが、それは自国の事例の紹介にとどまっており、提言の形になっていなかった。そこで、フィードバックで、「問題点」と「対策」の対応に注意するよう個別に指示した結果、Bについては、第二稿で対策部分を「政府の支援によりリサイクル技術が向上し、ゴミが減量することでゴミ置き場の問題も軽減する」という趣旨の記述を加え、対応を明確にすることができた。

「リサイクル」に続いて書かせた「高齢化」の作文では、6名の学生全般に「問題点」と「対策案」のより強い対応が見られた。学生Aについても、「高齢化」の作文の方が、より個別の項目の対応に注意が払われているのが観察される（表7）。学生Cも「対策」部分が提言として述べられていた。このように、「問題解決型」の作文で、自身が問題点として指摘したものとその対策（提言）との対応については、フィードバックによって十分な変化が見られた。

表7 「高齢化」第一稿の構成

	学生A	学生B	学生C
問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の介護 ・少子化 ・労働力減少・税収減少・年金や医療費増大 →経済力低下 	<ul style="list-style-type: none"> ・選挙権を持つ人の大半が高齢者になる →労働者や児童福祉の軽視 →若い世代に重い税負担 	<ul style="list-style-type: none"> ・税収入が減る ・労働人口が減る ・医療費・年金・福祉の支出が増える
対策案	<ul style="list-style-type: none"> ・定年を延ばす →労働人口が増える →高齢者の健康維持 ・子育てしながら働ける環境作り →出生率が上がる 	<ul style="list-style-type: none"> ・景気回復・デフレ脱却 →購買力が高まり税収が増える →出生率が高まる 	<ul style="list-style-type: none"> ・出生率を上げる ・長期滞在する外国人のための法律・制度を作る（移民の奨励）

この活動を振り返って、気づかされた点がある。第一稿を書く前にフィードバックで伝えた内容をよりわかりやすく学生に伝えられていれば、最初からもう少し対応が明確なものが書けたのではないかという点である。そのためには、「構成シート」の改善が有効だろう。これらの課題の「構成シート」は単に段落構成の大枠を示しただけのものであり、個々の項目間の対応が学生にとっては明示的でなかったため、その形式を改善することによって、問題点と提言の対応関係がより明確な「問題解決型」意見文の作成につながるのではないかと考えている。

4. 教師間の協働に向けた提言

ここまで、2013年度第二期の各クラスにおける実践を報告し、各担当者にとっての今後の課題についても触れた。

本章では、前章では紹介できなかった、クラス共通の問題点について述べる。筆者らの話し合いの過程で、それらの問題点を解決するためには、「作文」担当者だけでなく、U初級コースで日本語の授業を担当する教師の横の連携が必要であることが認められたことから、今後の作文指導をより良いものにしていくために、教師間の協働に向けた提言も行いたい。

まず、中級レベルになると学習する文型・表現が書き言葉中心になるが、学生の書いた作文の中に、違和感を感じさせる表現が使われていることに気づかされた。具体的には、「AだのBだの」という表現による列挙や、問題提起の表現として「～と言えるかどうか」という表現が段落末に使用されたものが挙げられる¹⁸⁾。また、日常的に使用されている語彙の中に、「ねばならぬ」、「(～はある)まい」といった最近では使用頻度の低い、固く古風な語彙が混じったものである。これは、主教材である『中級日本語』が出版から20年近く経っている教材であることと、読解の素材が新聞の投書やエッセイといった、レポート・論文のモデルとはならない文章であることが原因だと考えられる。しかし、学生は、スタイルの違いに気づかず、一律に書き言葉として理解しているため、作文の中にしばしば不自然な表現が使われるようになる。この点を解決するためには、まず、この問題をU初級コースの日本語授業担当者間で共有し、各担当者が主教材の語彙・表現導入時には使用場面やスタイルを意識づけるようにすること、また、「理解語彙」と「使用語彙」を区別して導入することが有効だと考えられる。

次に、文章全体の構成に関わる問題として、主教材にも、読解の授業で速読教材として使われているものにも、学生にとって意見文のモデルとなるような文章がみられない点があげられる。そこで、モデルとなる質のいい意見文にふれる機会があればありがたい。第二期は、論文作成の前段階であり、主張を含む「意見文」の構成を学ぶが、主張、根拠、反対立場への反論など、作文のモデルとなるような構成を含む文章を、作文の授業内で紹介する時間をとることはなかなか困難である。意見文を読む機会が増えれば、構成だけでなく、各構成部分で必要な表現や言い回しのインプットが増え、文を産出する手助けになるのではないと思われる。また、構成だけでなく、意見文のテーマに関連した文章に触れる機会があれば、作文を書く時のアイディアや語彙・表現選択の助けにもなるであろう。そのために、例えば、「読解」授業の一部を「作文」とリンクさせ、意見文の構成モデルとなるもの、あるいは、作文に役立つ情報を含む題材を組み込むことも一案であろう。

5. おわりに

本稿では、2013年度第二期における各クラスの「作文」授業概要と、「作文指導項目リスト」との関連を報告し、授業で有効であった活動についても紹介した。それによって、学生と筆者らにとっての課題を明確化することができた。また、筆者ら4名が互いに「他者とのインターアクション」をしたことによって、今後の授業の改善に向けて、多くの示唆が得られた。さらに、クラス共通の問題点を明らかにした上で、今後の「作文」授業に対する教師間の協働についても提言を行った。

第一期、第二期を通したU初級コースの作文授業についての情報共有によって、共通のゴー

ルに向かったの指導項目の参照枠を作成することができた。また、クラス共通の課題も浮かび上がり、同一教科内での連携が一定の効果をあげたと言えるであろう。今後さらに作文授業の効果をあげるためには、U初級コースの日本語授業の担当者同士の連携やその他技能との連携も視野に入れることが考えられる。

今後は作文指導項目リストに基づいた2013年度第三期の授業の実践と情報の共有を通して、新たな課題を明らかにしたい。また、作文指導項目リストの項目の妥当性の検討と見直し、および記述の精緻化も必要だと考えている。

資料 U初級コース作文指導項目リスト（2013年度版）

	第一期	第二期	第三期
行動目標	日常的な内容の文章が書ける	日常を超えた事柄について、まとまりある説明文が書ける	与えられたテーマで、根拠と主張が明確な意見文が書ける
指導項目	I a. 重文、複文構造の文が書ける I b. 導入・本文・まとめの三部構成で書ける I c. 時間的な順序を追って書ける I d. 身の回りの事柄について書ける I e. 内容に即して段落が作れる I f. 希望や意思を伝える文が書ける	II a. 主述が対応した文が書ける II b. 話し言葉を混ぜずに文体を統一して書ける II c. 決められたアウトラインを使って文章が書ける II d. 順序立てて並べた書き方ができる II e. 適切な例を挙げて書ける II f. 対比させて書ける	II g. 物事の定義が書ける II h. 事実と考えを分けて書ける II i. 予想される反論に反駁できる II j. 根拠を挙げて主張が述べられる II k. 情報を整理しまとめられる III a. レポート作成のためのアウトラインが作れる III b. アウトラインに沿って、資料を用いて段落を充実させられる III c. 論点を入れ、それをめぐる議論を十分に展開できる III d. 論理展開に合わせて、情報の整理・再構築ができる III e. 主張を客観的な視点で表現できる III f. ルールに則って引用ができる III g. 図表のデータの説明が書ける III h. 文体や目的に応じた語彙の選択ができる III i. 章・節に見出しがつけられる III j. 箇条書きができる III k. 先行オーガナイザー ¹⁹⁾ が使える

【注】

- 1) Uコースの概要については、大阪大学日本語日本文化教育センターホームページを参照されたい。<http://www.cjlc.osaka-u.ac.jp/japanese/program/u/> (2014年10月1日)。なお、本稿で報告する2013年度のUコースでは、日本語レベルの高い順にU1からU8の8クラスが開講された。本稿はそのうちU4、U5、U6、U8クラスにおける作文授業の報告である。
- 2) 表1中の週と作文の授業回数は、第一期からの通し番号である。
- 3) テーマは全クラス共通だったが、出題方法に差をつけた。U4～U6は、2題のうち1題出るからどちらも準備するよう伝え、試験当日、自分で1題選択して書くようにという指示が出された(文字数は、1000字以上)。U7、U8には、あらかじめ2題のうち1題選んで準備するようという指示が出された(文字数は、800字以上)。
- 4) この問題は、ニューズウィーク日本版2010年6月9日号掲載の「大学生にパソコン禁止令!」という記事をもとにしている。<http://www.newsweekjapan.jp/stories/us/2010/07/post-1436.php> (2014年10月1日)
- 5) NHKデジタル教材ビデオクリップ「心臓の動き」<http://www.nhk.or.jp/school/list/clip.html> (2014年10月1日)
- 6) NHKデジタル教材ビデオクリップ「ロボットにはできない人体の動き」<http://www.nhk.or.jp/school/list/clip.html> (2014年10月1日)
- 7) 学生が挙げた表現は、「～と言えよう」、「～とすることができる」、「～と思う」、「～と思われる」、「～と考えられる」、「～のではないだろうか」、「～はずだ」の七つだった。
- 8) ここでいう「先行オーガナイザー」とは、石黒(2012:182-187)で「後続の文章の内容を理解しやすいように、つぎに出てくる内容を予告する表現」として紹介されている「予告文」と「序列表現」の二種類を指すものとして使用している。
- 9) 「最後通牒ゲーム」のルールは以下のとおり。A、B二名がそれぞれ別の部屋に通される。AとBは、見知らぬ他人で、ゲームの前後にも顔を合わせることはない。Aに1万円(本来、金額に決まりはないが、授業では1万円とした)が渡され、いくらでもいいからBに渡す金額を決めるように言われる。Aは、1円以上の任意の金額を指定する。BもこのルールやAが一万円受け取ったことを知っており、BがAからのオファーを受ければ、双方がそれぞれの金額を受け取ってゲームは終了する。しかし、Bが拒否すれば、AもBも1円も受け取ることができない。
- 10) 第一期に行ったピア活動については三登ほか(2014)を参照されたい。
- 11) 吉田(2008)では、対象が実験群と統制群にわけられ、どちらも2つの作文(第一作文と第二作文)を書いている。実験群のみアイデアシートを使った構想活動をした後に第二作文を書き、第一作文と比較された。アイデアシートの記入は個人で行い、ディスカッションは行われていない。
- 12) 三登ほか(2014)でも言及している通り、U5のある学生は「できるだけ短くのが良い作文である」「色々書いたら先生に笑われる」というビリーフを持っている。
- 13) 影山(2001)にも同様の指摘がある。
- 14) 第二期に行ったアンケートによる。
- 15) 藤森ほか(2011)も、アカデミックな日本語運用能力を高めるには、AJ①〈言語知識+言語技能〉という能力とAJ②〈問題発見・分析的思考力・問題解決能力〉といった能力の両者が必要であると、問題発見・解決に関わる思考の重要性を指摘している。(AJはアカデミック・ジャパニーズの略語)
- 16) 問題は以下の4題

- ・若い時はお金はあまり使わないで貯金した方がいいという意見と、勉強や旅行など有意義なことにお金を使う方がいいという意見があるが、どちらの意見に賛成か。
 - ・高層マンションに住む場合、低い階がいいか、高い階に住むほうがいいか。
 - ・小学校の算数の授業を成績別にしたほうがいいか、成績別のクラスにしないほうがいいか。
 - ・留学生のための大規模な学生寮を建てる計画がある。建築場所は都会がいいか、田舎（郊外）がいいか。
- 17) このようなクラス内のグループ活動では、TAの参加を得ることで発言を活発化させることができた。
- 18) 「～と言えるかどうか」をはじめ、『中級日本語』を使用する学生の作文に見られる不自然な表現については、伊集院（2011）に詳しい。
- 19) 前掲注 8

【参考文献】

- 伊集院郁子（2011）「文章表現指導の観点から『中級日本語』の文型を考える」『留学生日本語教育センター論集』37号 東京外国語大学 pp.47-61
- 井上尚美（1989）「IV主張と理由づけの構造」『言語論理教育入門—国語科における思考—』pp.82-119 明治図書出版
- 影山陽子（2001）「上級学習者による推敲活動の実態—ピア・レスポンスと教師フィードバック—」『お茶ノ水女子大学人文科学紀要』第54巻 pp.107-119
- 木戸光子・石上綾子・加藤あさぎ・田中孝始ほか（2012）「日本語スタンダードに基づく中上級日本語作文コースの構築に向けて—補講コース「J500—900書く」の報告—」『日本語教育論集』第27号 筑波大学留学生センター pp.207 - 227
- 長谷川哲子・堤良一（2012）「意見文の分かりやすさを決めるのは何か？—大学教員による作文評価を通じて—」『関西学院大学日本語教育センター紀要』創刊号 pp.7-18
- 林治郎（2005）「6 文章における事実と論理」大阪工業大学言語表現技術研究会編『言語表現技術ハンドブック』pp.68-80
- 広瀬和佳子（2000）「母語によるピア・レスポンス（peer response）が推敲作文に及ぼす効果—韓国人中級学習者を対象とした3ヶ月間の授業実践をとおして—」『言語文化と日本語教育』第19号 お茶ノ水女子大学 pp.24-37
- 藤村知子・金子比呂子・伊丹千恵（1995）「橋渡しの中級作文教育—初級作文からレポート・論文へ—」『留学生日本語教育センター論文』21 東京外国語大学 pp.97-126
- 藤森弘子・鈴木智美・鈴木美加・中村彰ほか（2011）「全学日本語プログラムの取組と課題—アカデミック・ジャパン能力向上の観点から—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』37 pp.119-134
- 細川英雄（2005）「実践研究とは何か—『私はどのような教室をめざすのか』という問い—」『日本語教育』126号 pp.4-14 日本語教育学会
- 三登由利子・藤井千枝・菅撰子・真下恭子（2014）「大学学部予備教育課程（Uコース）における作文教育の実践報告（1）—実践の共有から共通指導項目リストの作成へ—」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』第12号 pp.49-69
- 吉田美登利（2008）「『アイディアシート』を使った作文構想支援の効果」『日本語教育』138号 pp.102-111 日本語教育学会

【参考資料】

東京外国語大学留学生日本語教育センター（2011）「JLCスタンダード2011 改訂版」

【使用教材】

アカデミック・ジャパニーズ研究会編（2001）『大学・大学院留学生の日本語2 作文編』アルク

石黒圭・筒井千絵（2009）『留学生のためのここが大切文章のルール』スリーエーネットワーク

佐藤政光・戸村佳代・田中幸子・池上摩希子（2002）『表現テーマ別 にほんご作文の方法』第三書房

東京外国語大学 留学生日本語教育センター（1994）『中級日本語』凡人社

友松悦子（2008）『小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク

友松悦子・和栗雅子（2007）『中級日本語文法要点整理ポイント20』スリーエーネットワーク

（みと ゆりこ 本センター非常勤講師）

（ふじい ちえ 本センター非常勤講師）

（かん せつこ 本センター非常勤講師）

（ました きょうこ 本センター非常勤講師）